愛撫

梶井基次郎

猫の耳というものはまことに可笑（おか）しなものである。薄べったくて、冷たくて、竹の子の皮のように、表には絨毛（じゅうもう）が生えていて、裏はピカピカしている。硬（かた）いような、柔らかいような、なんともいえない一種特別の物質である。私は子供のときから、猫の耳というと、一度「切符切り」でパチンとやってみたくて堪（たま）らなかった。これは残酷な空想だろうか？

否。まったく猫の耳の持っている一種不可思議な示唆（しさ）力によるのである。私は、家へ来たある謹厳な客が、膝へあがって来た仔猫の耳を、話をしながら、しきりに抓（つね）っていた光景を忘れることができない。

このような疑惑は思いの外に執念深いものである。「切符切り」でパチンとやるというような、児戯に類した空想も、思い切って行為に移さない限り、われわれのアンニュイのなかに、外観上の年齢を遙かにながく生き延びる。とっくに分別のできた大人が、今もなお熱心に――厚紙でサンドウィッチのように挾んだうえから一思いに切ってみたら？　――こんなことを考えているのである！　ところが、最近、ふとしたことから、この空想の致命的な誤算が曝露してしまった。

元来、猫は兎のように耳で吊り下げられても、そう痛がらない。引っ張るということに対しては、猫の耳

は奇妙な構造を持っている。というのは、一度引っ張られて破れたような痕跡が、どの猫の耳にもあるのである。その破れた箇所には、また巧妙な補片（つぎ）が当っていて、まったくそれは、創造説を信じる人にとっても進化論を信じる人にとっても、不可思議な、滑稽な耳たるを失わない。そしてその補片（つぎ）が、耳を引っ張られるときの緩（ゆる）めになるにちがいないのである。そんなわけで、耳を引っ張られることに関しては、猫はいたって平気だ。それでは、圧迫に対してはどうかというと、これも指でつまむくらいでは、いくら強くしても痛がらない。さきほどの客のように抓（つね）って見たところで、

ごく稀（まれ）にしか悲鳴を発しないのである。こんなところから、猫の耳は不死身のような疑いを受け、ひいては「切符切り」の危険にも曝（さら）されるのであるが、ある日、私は猫と遊んでいる最中に、とうとうその耳を噛（か）んでしまったのである。これが私の発見だったのである。噛まれるや否や、その下らない奴は、直ちに悲鳴をあげた。私の古い空想はその場で壊（こわ）れてしまった。猫は耳を噛まれるのが一番痛いのである。悲鳴は最も微（かす）かなところからはじまる。だんだん強くするほど、だんだん強く鳴く。Crescendo のうまく出る——なんだか木管楽器のような気がする。

私のながらくの空想は、かくの如くにして消えてしまった。しかしこういうことにはきりがないと見える。この頃、私はまた別なことを空想しはじめている。それは、猫の爪をみんな切ってしまうのである。猫はどうなるだろう？　おそらく彼は死んでしまうのではなかろうか？

いつものように、彼は木登りをしようとする。――できない。人の裾を目がけて跳びかかる。――異（ちが）う。爪を研（と）ごうとする。――なんにもない。おそらく彼はこんなことを何度もやってみるにちがいない。そのたびにだんだん今の自分が昔の自分と異うことに気がつ

いてゆく。彼はだんだん自信を失ってゆく。もはや自分がある「高さ」にいるということにさえブルブル慄えずにはいられない。「落下」から常に自分を守ってくれていた爪がもはやないからである。彼はよたよたと歩く別の動物になってしまう。遂にそれさえしなくなる。絶望！　そして絶え間のない恐怖の夢を見ながら、物を食べる元気さえ失せて、遂には——死んでしまう。

爪のない猫！　こんな、便りない、哀れな心持のものがあろうか！　空想を失ってしまった詩人、早発性痴呆に陥った天才にも似ている！

この空想はいつも私を悲しくする。その全き悲しみのために、この結末の妥当であるかどうかということさえ、私にとっては問題ではなくなってしまう。しかし、はたして、爪を抜かれた猫はどうなるのだろう。眼を抜かれても、髭（ひげ）を抜かれても猫は生きているにちがいない。しかし、柔らかい蹠（あしのうら）の、鞘のなかに隠された、鉤（かぎ）のように曲った、匕首（あいくち）のように鋭い爪！　これがこの動物の活力であり、智慧（ちえ）であり、精霊であり、一切であることを私は信じて疑わないのである。

ある日私は奇妙な夢を見た。

X――という女の人の私室である。この女の人は平

常可愛い猫を飼っていて、私が行くと、抱いていた胸から、いつもそいつを放して寄来すのであるが、いつも私はそれに辟易(へきえき)するのである。抱きあげて見ると、その仔猫には、いつも微かな香料の匂いがしている。

夢のなかの彼女は、鏡の前で化粧していた。私は新聞かなにかを見ながら、ちらちらその方を眺めていたのであるが、アッと驚きの小さな声をあげた。彼女は、なんと！　猫の手で顔へ白粉(おしろい)を塗っているのである。私はゾッとした。しかし、なおよく見ていると、それは一種の化粧道具で、ただそれを猫と同じように使っているんだということがわかった。しかしあまりそれ

が不思議なので、私はうしろから尋ねずにはいられなかった。

「それなんです？　顔をコスっているもの？」

「これ？」

　夫人は微笑とともに振り向いた。そしてそれを私の方へ抛(ほう)って寄来した。取りあげて見ると、やはり猫の手なのである。

「いったい、これ、どうしたの！」

　訊(き)きながら私は、今日はいつもの仔猫がいないことや、その前足がどうやらその猫のものらしいことを、閃光(せんこう)のように了解した。

「わかっているじゃないの。これはミュルの前足よ」
彼女の答えは平然としていた。そして、この頃外国でこんなのが流行るというので、ミュルで作って見たのだというのである。あなたが作ったのかと、内心私は彼女の残酷さに舌を巻きながら尋ねて見ると、それは大学の医科の小使が作ってくれたというのである。私は医科の小使というものが、解剖のあとの死体の首を土に埋めて置いて髑髏を作り、学生と秘密の取引をするということを聞いていたので、非常に嫌な気になった。何もそんな奴に頼まなくたっていいじゃないか。そして女というものの、そんなことにかけての、

無神経さや残酷さを、今更のように憎み出した。しかしそれが外国で流行っているということについては、自分もなにかそんなことを、婦人雑誌か新聞かで読んでいたような気がした。――

猫の手の化粧道具！　私は猫の前足を引っ張って来て、いつも独り笑いをしながら、その毛並を撫でてやる。彼が顔を洗う前足の横側には、毛脚の短い絨氈のような毛が密生していて、なるほど人間の化粧道具にもなりそうなのである。しかし私にはそれが何の役に立とう？　私はゴロッと仰向きに寝転んで、猫を顔の上へあげて来る。二本の前足を掴んで来て、柔らか

いその蹠（あしのうら）を、一つずつ私の眼蓋（まぶた）にあてがう。快い猫の重量。温かいその蹠。私の疲れた眼球には、しみじみとした、この世のものでない休息が伝わって来る。

仔猫（こ）よ！　後生だから、しばらく踏み外（はず）さないでいろよ。お前はすぐ爪を立てるのだから。

底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社
１９７２（昭和47）年12月10日初版発行
１９７４（昭和49）年第４刷発行
入力：j.utiyama
校正：高橋美奈子
１９９９年１月11日公開
２００５年10月２日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。